

岐阜県のやきもの —資料紹介展「岐阜県のやきもの」出品作品を中心として—(上)

守屋 靖裕

Ceramics of Gifu Prefecture

—With a Focus on the Works of the Exhibition "Ceramics of Gifu Prefecture"— (I)

Yasuhiro MORIYA

緒言

岐阜県博物館は、平成21年(2009)1月24日から3月22日にかけて資料紹介展「岐阜県のやきもの」を開催した。この展覧会では、当館が収蔵(所蔵・寄託・借用)している岐阜県各地のやきものを展示した。県内のやきものの多種多様さについて、実物を通して理解することを主たるねらいとした。しかし、この展覧会の図録は発行されていない。

そこで、この場を借りて、本展の出品作品について個別に解説をし、データ・写真とともに紹介をする。これを中心としながら岐阜県のやきものについて概観する。つまり、展覧会図録に代えて本稿を成すものである。同時にこの誌面において作品を紹介し、広く江湖の教示を得たく思うものである。

〈凡例〉

- ・資料紹介展「岐阜県のやきもの」の展示構成は以下の通りである。

はじめに

- 1 西濃のやきもの
- 2 岐阜のやきもの
- 3 中濃のやきもの
- 4 東濃のやきもの
- 5 飛騨のやきもの

おわりに

本稿の構成は、この展示構成を「緒言」と「結語」とで挟んだ形式とした。

- ・「4 東濃のやきもの」以降は第32号に掲載予定である。
- ・作品解説の記述は原則として、出品番号、名称、員数、やきものの種類、作者、出土地、制作時期、法量(単位はcm)、所蔵者、解説文の順に記した。

はじめに

岐阜県はやきものの産地として有名である。特に志野や織部などの美濃桃山陶は評価が高く、全国的にも名高い。しかし、岐阜県では他にも様々なやきものが各地で作られた。例えば、西濃地方の温故焼、岐阜地方の金華山焼、中濃地方の安桜焼、東濃地方の西浦焼、飛騨地方の洪草焼など、多くの優れた陶磁器が生み出された。

資料紹介展「岐阜県のやきもの」では、志野や織部などの美濃桃山陶の魅力を示しながら、それ以外にも県内各地で優れたやきものが多種多様に生み出されたことを紹介した。

1 西濃のやきもの

(1) 養老焼(大垣市上石津町・養老町)

養老焼は、尾張国津島村(愛知県津島市)の医師・文人、大橋秋二が晩年に創始した。嘉永～安政年間(1848～60)(秋二は安政4年〔1857〕10月20日没)に養老山に窯を築き、茶器などを焼いたのが始まりとされる。還暦祝いに、野菊の花を描いた61個の茶碗を作り、知人等に贈ったものが有名である。養老の山野に自生する特殊な野菊の花を描いた茶碗で、地元で珍重されたという。

また、明治21年(1888)頃、名古屋の人、素心が養老公園で観光土産として楽焼風の茶碗を作っていた。名古屋から陶工を雇い、牧田村(大垣市上石津町牧田)の土を混入して販売していた。

後に明治35年(1902)、陶器に心を寄せた大工、小谷嘉市が牧田村字門前で陶土を発見し、「養老焼」と名付けて製陶を開始する。しかし、あまり振るわなかった。同39年(1906)に同村上野宮ヶ谷地で良土を発見し、再興を図って一時好調を見た。しかし、再び不振となった。

職人として働いていた伊藤国太郎が後を継ぎ、養老駅前に窯を移し、養老酒の壺などを焼いた。大正時代中期まで続き、廃業した。この一連の牧田の養老焼に対して、地元では「茶碗屋」・「めじろ焼」などと呼んでいたらしい。しかし、「養老焼陶器製造組合」と称して生産しており、看板も現存する。

また、佐野周雄が昭和5～6年（1930～31）頃から同40年（1965）まで製陶している。

昭和53年（1978）2月に養老焼保存会が結成された。しかし、小冊子『ふる里の土の香り 養老焼』（1986年3月）の編集を最後に解散した。会の志はグループ炎が継いだ。

現在創陶苑（昭和42年〔1967〕創設）の田部井健二が養老焼を焼いている。昭和57年（1982）に養老焼陶村が作られている。養老焼は岐阜県郷土工芸品に指定されている。

1-01 象嵌暦手茶碗 1口

養老焼

江戸時代後期～昭和時代（19世紀後半～20世紀前半）

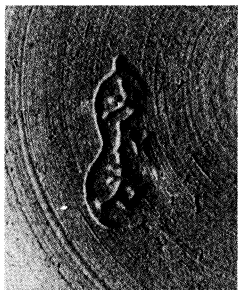
高9.8 口径16.6 高台径7.9

個人蔵



茶碗の胴に白土象嵌による暦手文をあらわす。本作品は三島写しである。

三島とは朝鮮時代の民窯で焼かれた陶器である。高麗象嵌青磁の技法が衰えて一作風を成した形・文様とともに新生の白土象嵌の陶器をいう。三島は九州の八代・現川・薩摩や、萩、出雲、瀬戸などでも模作された。京都では青木木米や仁阿弥道八などが三島写しを作った。本作品は養老焼による三島写しの例である。



銘印

本作品の高台内に「養老」の銘印を押す。その形は地元の名物、瓢箪を象る。

（2）温故焼（大垣市）

「赤坂焼」・「御勝山焼」・「美濃万古」の別名を持つ。不破郡赤坂村（大垣市赤坂町）の金生山麓で焼かれた。

創始者の清水平七は叔父の清水孫六に楽焼を学び、京都の清水焼、備前の伊部焼なども学んだ。また、桑名の森有節（万古焼の再興者）にも学ぶ。加藤春岱が務めていた今尾藩竹腰氏の御用窯を継ぎ、「魁翠園焼」と世に呼ばれた秀作を作る。

その後、安政6年（1859）赤坂のお茶屋敷に開窯した（嘉永2年〔1849〕説もあり）。当初は「古藤」・「金生山」・「金生堂」・「御勝山」（金生山の南に隣接する小山）などの刻印を使用した。大垣藩家老、小原鉄心に認められ、藩御用と「温故」の号を賜った後は、小判形の「温故」の銘印を用い、「温故焼」と称するようになった。

温故焼は中山道赤坂宿の往来によって東日本を中心に普及した。温故の作品は明治10年（1877）の内国勸業博覧会や、明治11年（1878）のパリ万国博覧会などに出品されて、賞牌を受けた。名声が高くなり、模倣品が売られるようにもなった。そこで、同20年（1887）商標を登録し、以後は龍で囲んだ温故印を押した。

薄銀茶褐色に焼き締めた無釉の素地と、精緻な文様を特色とする。金生山の赤土と御勝山の白土を混ぜて素地を作る。そこに山水文・花鳥文などを金銀で彩色したり、鉄筆で彫刻を施したりする。「温故」の号を賜る前、平七は松皮文を発明して「松皮仙」とも号した。

温故焼では煎茶器を中心として花器・酒器などを作った。数多くの陶工を輩出し、初代～四代温故、清水石僊、河野大雅、清水旭山、牧石香、清水石峰、桜井陸仙、早野一石、林杭川がいる。

1-03 金蒔絵四君子文急須 1台

温故焼 清水温故作

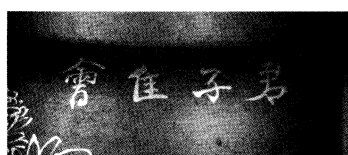
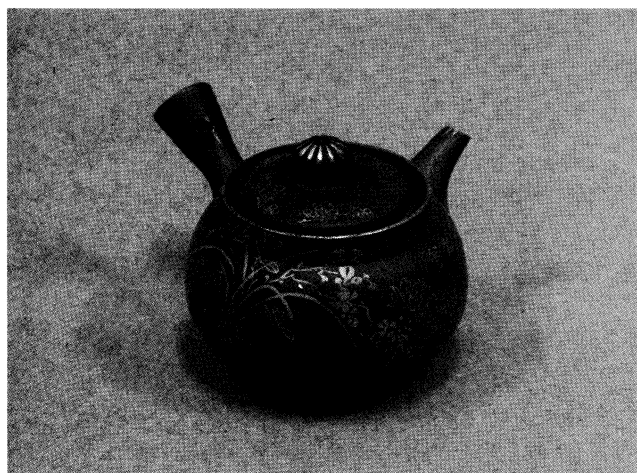
江戸時代後期～明治時代（19世紀後半）

総高5.9 口径4.8 胴径5.6 底径4.1

岐阜県博物館蔵

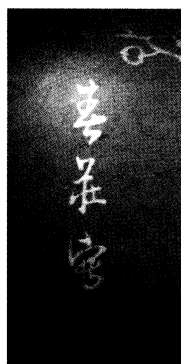
温故焼には小品が多い。この急須もその一例である。まっすぐな把手が横に付いた横手の急須である。

口縁に金の覆輪を施す。急須の胴に四君子（菊・竹・梅・蘭）を金蒔絵で描く。その右上に「君子佳會」の賛を添える。左下には「春莊寫」の署名がある。釉薬は施さない。



賛

本作品は温故焼の特色をよく示した作品である。金蒔絵による精緻な表現が、茶褐色の素地の上で輝きを放つ。



署名

四君子を描いた春荘とは田川春荘（本名は善近）（1856～1922）である。明治時代から大正時代にかけて、兵庫県川辺郡の地方行政において活躍した人物である。要職を歴任した後、明治22年（1889）から大正2年（1913）まで小浜村（宝塚市）長を務めた。盛んに書画を制作し、森琴石を師とした。日本美術協会や日本画会において受賞も多い。現存作品は宝塚市やその周辺に見られる。伊丹市個人宅にも作品が遺るが、そこは河野大雅（1826～1904）の家系の家である。本作品の四君子を描いた春荘の作品が、本作品を焼いた清水温故（1824～96）（1826年出生説もあり）の弟子、大雅の家系に伝わっていることは、彼らの人的交流をうかがい知る上で非常に興味深い事実である。



銘印

本作品の蓋の摘みは回転する。これは作者の温故が師事した森有節（1808～82）からの影響と考えられる。有節は弟の千秋（1816～64）とともに万古焼を再興した。森兄弟は細工を得意とし、急須の蓋の摘みが回る仕掛けを生み出した。また、森兄弟は赤土と白土の練り込みという新趣向も生み出している。温故焼が金生山の赤土と御勝山の白土を混合して素地を作っている発想の源

は、ここにあるものと推測することができる。

本作品の把手には、小判形の長円で囲んだ「温故」の銘印を押す。明治20年（1887）以後は龍で囲んだ温故印を押すため、本作品の制作時期の下限を、明治20年とすることができる。

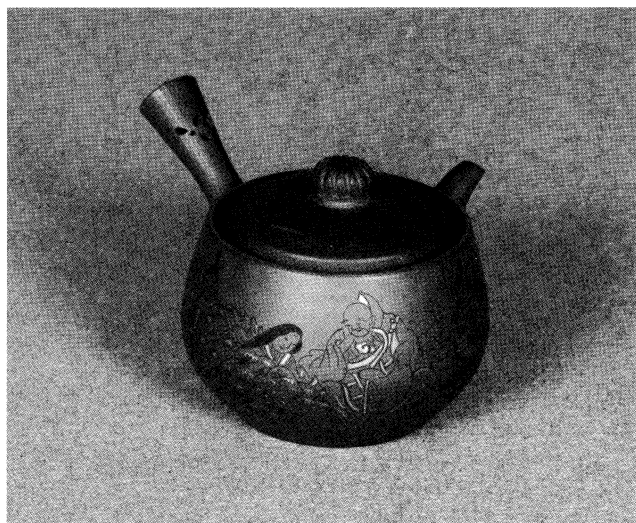
1-04 金蒔絵六歌仙図急須 1合

温故焼 清水温故作

明治時代（19世紀後半）

総高6.8 口径6.4 胴径6.7 底径5.2

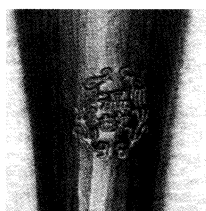
岐阜県博物館蔵



小品の急須で、横手のもの。

急須の胴に六歌仙（僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主）を金蒔絵で描く。三代清水温故の作品にも金蒔絵六歌仙図急須が現存する（『濃飛のやきもの』〔展覧会図録〕愛知県陶磁資料館、1985年6月、図60）。

本作品のように、茶褐色の表面に精緻な文様を金で彩色する表現方法は、温故焼の特色である。



銘印

金蒔絵四君子文急須（出品番号1-03）と同様、本作品の蓋の摘みが回転する。

龍で囲んだ「温故」の銘印を把手に押す。よって、本作品は明治20年（1887）以後の制作と見ることができる。

1-05 金蒔絵蝶文花生 1口

温故焼 清水温故作

明治時代（19世紀後半）

高12.5 口径4.8 胴径6.9 高台径5.1

岐阜県博物館蔵



小品の花生である。

口縁に金の覆輪を施す。胴に飛ぶ蝶を、高台に唐草文を金蒔絵であらわす。釉薬を施していない茶褐色の素地に、絵や文様が精緻に描かれる。温故焼の特色をよくあらわした作品である。

頸及び腰にそれぞれ松の樹皮のような文様をあらわす。これは松皮文と呼ばれるものであり、温故が創造した表現である。以後の温故焼にも多く見られる。



銘印

龍で囲んだ「温故」の銘印を高台脇に押す。よって、本作品は明治20年（1887）以後の制作であることがわかる。

1-06 松皮文茶器揃 6点

温故焼 四代清水温故作

昭和時代（20世紀）

〈急須〉総高10.2 口径7.7 胴径9.5 底径5.7

〈茶碗その1〉高5.4 口径7.2 高台径3.8

〈茶碗その2〉高5.4 口径7.2 高台径3.8

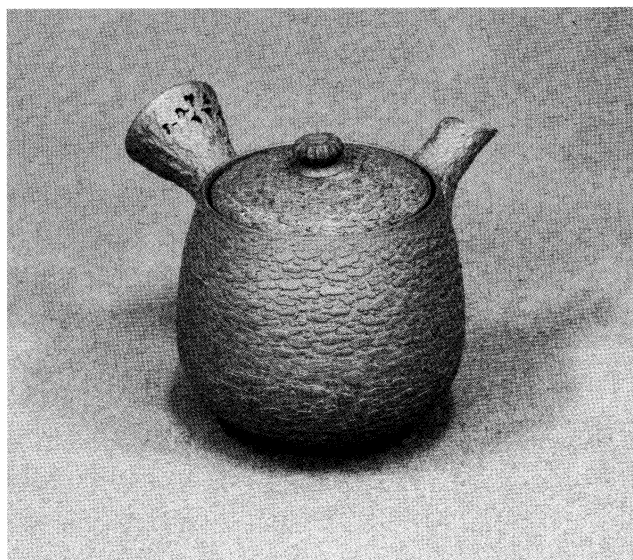
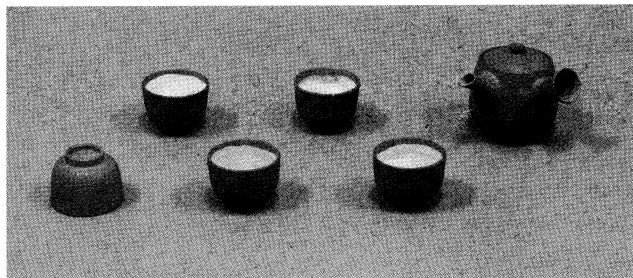
〈茶碗その3〉高5.3 口径7.2 高台径3.8

〈茶碗その4〉高5.3 口径7.2 高台径3.7

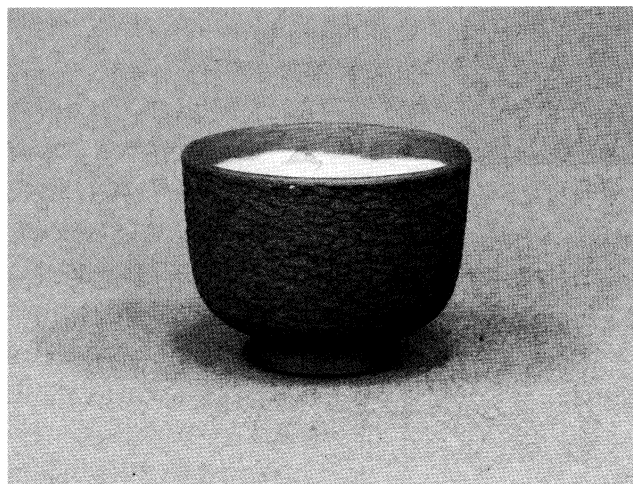
〈茶碗その5〉高5.4 口径7.2 高台径3.8

岐阜県博物館蔵

急須1台と茶碗5客のセット。茶碗は、右段の図版（上）において急須に近い順からその1、その2、……と並ぶ。



急須



茶碗その1

全6点の表面に松皮文をあらわす。また、本作品の外面は無釉で、金蒔絵も施されていない。このような松皮文のみを加飾に用いた作品は、温故焼によく見られる。

金蒔絵四君子文急須（出品番号1-03）や金蒔絵六歌仙図急須（出品番号1-04）と同様、本作品の急須の蓋の摘みも回転する。森有節から初代温故、そして四代温故へと受け継がれてきた細工であることがわかる。

龍で囲んだ「温故」の銘印を、急須の胴の下部と茶碗の高台脇にそれぞれ押す。



急須の銘印



茶碗その1の銘印

清水温故の名は4代まで世襲された。

(3) その他の西濃のやきものの例

- ・今尾焼（海津市平田町）
- ・巨鹿城焼（大垣市）
- ・霞間ヶ溪焼（池田町）

2 岐阜のやきもの

(1) (参考) 美濃須衛古窯跡群（各務原市・岐阜市・関市など）

美濃須衛古窯跡群は岐阜県内における最初期の窯跡である。よって、岐阜県やきもの史上、重要な遺跡である。そのため、本展覧会でも触れた。

最古の須恵器窯は6世紀末のものである。しかし、周辺から5世紀末の資料が採集され、古墳出土品の中にも美濃須衛産と考えられる資料が認められる。よって、5世紀後半代には須恵器生産が始められた可能性が高い。

7世紀後半に入ると、生産がしだいに拡大した。奈良時代初めには、この古窯跡群中の老洞窯・朝倉窯（いずれも岐阜市）で「美濃」・「美濃国」刻印須恵器を製造していた。ここから官営工場の性格を含んでいたことがわかる。全国で唯一国名の刻まれた須恵器であることも貴重である。この刻印須恵器は美濃国分寺跡、斎宮跡、平城宮跡からも出土している。奈良時代後半には須恵器生産の最盛期を迎えた。

10世紀には灰釉陶器生産も開始する。緑釉陶器も生産したと推測される。11世紀末には山茶碗窯に転換した。13世紀前半代に終焉を迎えた。

2-01 (参考) 坏・高坏 4口

須恵器 美濃須衛古窯跡群出土

〈坏その1〉古墳時代（6世紀前半）

高5.4 口径10.3 底径5.0

〈高坏その1〉古墳時代（6世紀前半）

高7.1 口径11.1 底径8.3

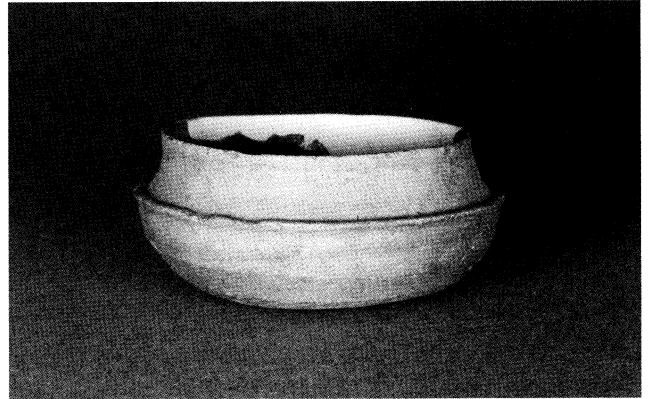
〈坏その2〉奈良時代（8世紀）

高4.9 口径16.6 高台径11.5

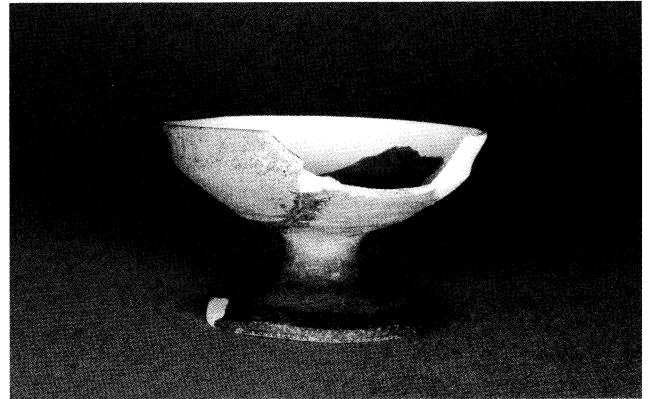
〈高坏その2〉奈良時代（8世紀）

残高11.0 高台径11.6

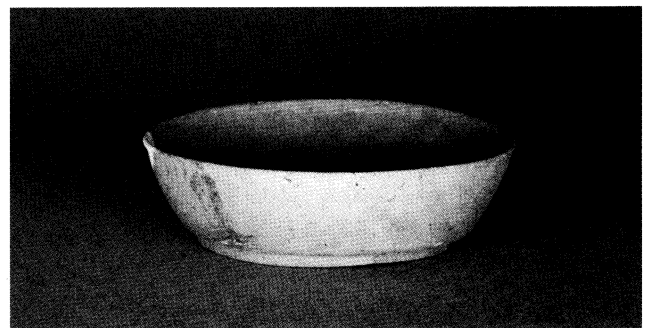
岐阜県博物館蔵



坏その1



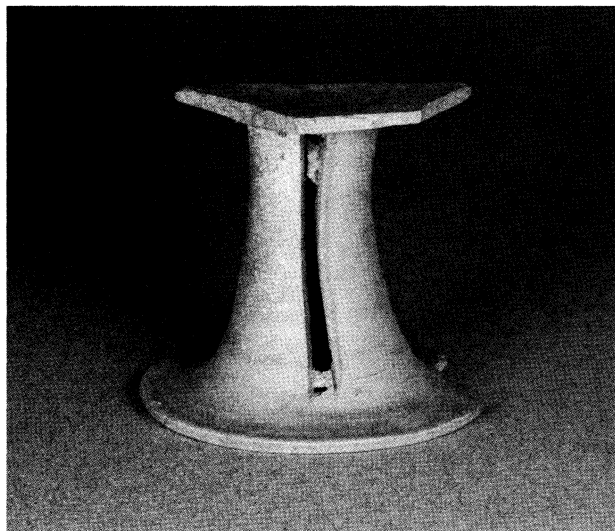
高坏その1



坏その2

岐阜県のやきものの歴史において、美濃須衛古窯跡群は重視してよい。同時にその製品も重要である。岐阜県においてやきもの生産が盛んであることを示す最古のものは、美濃須衛古窯跡群と、ここで作られた製品といえよう。

ここに示した4口の作品は6世紀以降のものであるが、美濃須衛古窯跡群の遺物である。各務原市内で表面



高坏その2

採集された須恵器である。

須恵器は5世紀前半に朝鮮半島からの渡来工人が日本にもたらした。1100℃以上の高温で還元焼成される。青灰色あるいは灰黒色を呈する。

坏は食物を盛るのに使用。これに高い台脚が付いたものが高坏である。

坏その1は元来蓋が附属していたと推測できる。高坏その2は坏部のほとんどを欠失し、現存する大部分は脚部である。

(2) 百曲焼（岐阜市）

金華山周辺では、茶道を愛好する武士・商人などが、江戸時代から断続的に茶器などを焼いていた。これらは概ね個人活動であり、技術の継承や総体的作風は見られない。

伝承では、織田信長が瀬戸の陶工に金華山麓で焼かせた御庭焼で、「岐山焼」というやきものがあったといわれる。しかし、作品も窯跡も確認されていない。

江戸時代には、岐阜町奉行などを務めた黒田六一郎（その作品を「黒六」と称する）や安藤百曲、横山鈴翁らが作陶した。この時期金華山は「御山」とも呼ばれ、これら江戸時代のものを「御山焼」ともいう。幕末から明治時代前半にかけては、河崎寿用や牧野西州らが活動した。

百曲焼は御山焼の一つである。名古屋出身の尾張藩士、安藤百曲（本名は正修）が制作した陶器である。号「百曲」は金華山登山道の一つに因む。安藤百曲は天保年間（1830～44）に岐阜町奉行所に赴任して後、屋敷内に窯を築いて始めた。百曲は楽家9代了入に陶法を学んだと考えられている。陶土は赤川洞（伊奈波神社付近）の土を使用したといわれる。作品に赤・黒の楽茶碗などがある。

る。楽家の楽印に倣い、「百曲」の銘印を押す。その印は陽字で円印である。

2-02 赤楽筒茶碗 1口

百曲焼 安藤百曲作

江戸時代後期（19世紀）

高10.3 口径8.9 高台径4.7

岐阜県博物館蔵



作者の百曲（1789～1865）は楽了入（1756～1834）と親交があり、了入から陶法を教わったと伝えられる。尾張藩には同時代に、裏千家第十一世玄々斎宗室の実兄で、尾張徳川家の家老を務めた渡辺規綱（1792～1871）がいた。若くして隠居し、御庭焼を興し、茶事に明け暮れたという。規綱は名古屋の茶道に大きな影響を与え、了入を自分の窯に招いている。そのような動向の中で百曲は陶芸を研鑽したものと推測することができる。

百曲焼には、赤・黒の楽焼風の茶碗が多い。本作品もその一つで、楽焼風の筒茶碗である。



銘印

高台に「百曲」の銘印を押す。陽字で円印である。楽家は楽印を用い、9代の了入以降のやきものはほぼ在印である。「百曲」の印はこれに倣ったものと考えられる。「百曲」の印について、尾張藩主、徳川斉荘（1810～45）から拝領したという説もある。斉荘

は御深井焼の再興に尽力し、萩山焼・東山焼を興した人物である。自らも作陶した。家老の規綱は斉荘の好み道具の指導に関わり、了入から作陶を習っている。斉荘と百曲の交流を想定し、その状況の中で印の拝領が行われ

たことを考えるのも一案であろう。

百曲焼は、京の文化が尾張で摂取され、岐阜において開花したものといえよう。本作品は、そのような文化の伝播を示す遺品といえることができるであろう。そして、その伝播が人的交流によってなされたと考えられることは、注目してよい。

(3) 金華山焼（岐阜市）

明治時代後半から昭和時代の初めにかけて金華山麓で焼かれたものに、福田旭水らの金華山焼、陶芸家の活動を行った矢島寿山の寿山焼、林晃三の千歳窯がある。

金華山焼は、岐阜市で茶舗「大吉園」を営む福田旭水（本名は金次郎）らが焼いた陶磁器である。明治23年（1890）頃、旭水は名古屋の柴山不言ら数人と岐山焼・御山焼の再興を目指した。しかし、翌年の濃尾震災の影響により中絶する。同29年（1896）、旭水は名古屋の二村久平らと金華山麓の篠谿園（梅林公園）近くに窯を築き、「金華山焼窯元」を開いた。土を外山（各務原市蘇原外山町）・芥見（岐阜市芥見）・東濃地域・金華山などに求めたという。当初は楽焼を焼いていた。同30年（1897）の連房式登窯導入以後、本格化させ、「金華山」の刻印のある製品を作った。

兎の斑釉系の「金華流し」という独特な技法を用い、親交のあった文人に絵付けを依頼するなど、風雅趣向の茶器を制作した。一方で、産業化を図り、鵜飼や岐阜提灯など、岐阜の名物をモチーフとした日常品や土産品、軍隊の記念品などを量産した。「金華山」の銘印を押し、ブランドとして、金華山の名を前面に押し出し、岐阜名産として販売拡大を図った。大正時代に最盛期を迎え、国外に輸出もされた。

しかし、2代目の旭山が早世し、3代目の旭峰も幼少であったため、旭水没（昭和3年〔1928年〕）後、まもなく断絶した。

「金華山焼」という名称は金華山麓で作られたやきものの総称として用いられることもある。しかし、旭水らは自身のやきものに「金華山焼」と命名し、この名称が一般化している事実もある。そのため、本稿では、金華山周辺で作られたやきものの総称としてではなく、旭水らのやきものに対する名称として、「金華山焼」という呼称を用いる。

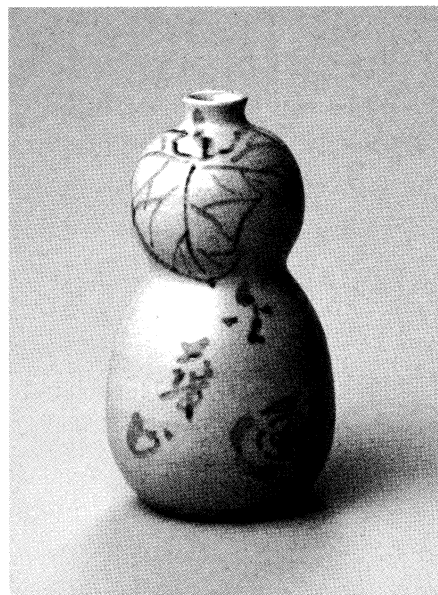
2-03 染付瓢形徳利

金華山焼 福田旭水作

明治29年（1896）～昭和3年（1928）

高13.1 口径2.1 底径4.6

岐阜県博物館蔵



本作品は瓢箪を象った瓢形徳利である。瓢箪からの連想により、瓢形は徳利によく採用される。

肩から胴の中央にかけて植物の葉を大きく描く。胴から腰にかけて「金華山」の文字を大きく書き、その名を前面に押し出す。

「金華山」の字の傍らに文様をあらわす。この文様を梅花文と見るか、木瓜文と見るかで考えが分かれる。

前者と見れば、篠谿園（梅林公園）との関連が思い浮かぶ。金華山焼が焼かれていた時期には、窯の近くにある篠谿園は梅の名所であった。岐阜に関わるモチーフを金華山焼が採用していたことを考えれば、梅花文は篠谿園の梅と解釈することも一案であろう。

一方、後者の木瓜文と見れば、これは織田信長が用いた家紋、織田瓜である。織田瓜は、5弁の唐花の周囲に5本の鑲を巡らし、これを5葉の外郭で囲んだ形式である。この形は本作品に描かれた文様と頗る合致する。そのため、本作品の文様は、梅花文よりもむしろ織田瓜に比定した方がよい。

この織田瓜が文様として採用された背景として、次の2点を考えることができる。

第1点は信長と岐阜との関係である。信長は斎藤氏を追放して美濃を奪取し、本拠地を尾張から井口に移し、地名を岐阜と改称した。居城を金華山上の岐阜城とした。

「天下布武」の朱印を使うようになったのはこの頃である。信長は城下町加納を楽市に指定するなどの施策も行った。足利義昭を奉じて上洛するまで、信長は岐阜を拠点としていた。このように岐阜との深い関係を持つ織田信長の家紋を、岐阜に関わるモチーフとして金華山焼が採用したと考えることができる。

第2点は、信長の御庭焼である岐山焼の再興の意図を旭水が持っていたことである。旭水がやきものを作り始めた要因は、信長の岐山焼についての伝承を知っていたこととされている。岐山焼の再興を目指すことは、信長の御庭焼を再興することとなり、金華山焼に織田瓜を採用することは自然な帰結である。



銘印

本作品は腰の糸切近くに「金華山」の銘印を押す。
 なお、岐阜市歴史博物館の所蔵品の中にも、「金華山」の文字と織田瓜をあらわした瓢形徳利がある（岐阜市歴史博物館 編・発行『館蔵品図録 金華山麓のやきもの』1996年2月、図版50）。灰釉を掛け、これを掻き落とすことにより、「金華山」の文字と織田瓜を浮かび上がらせている。この作品も旭水の作である。本作品が染付によって絵付けを施しているのと、表現技法を異にする。

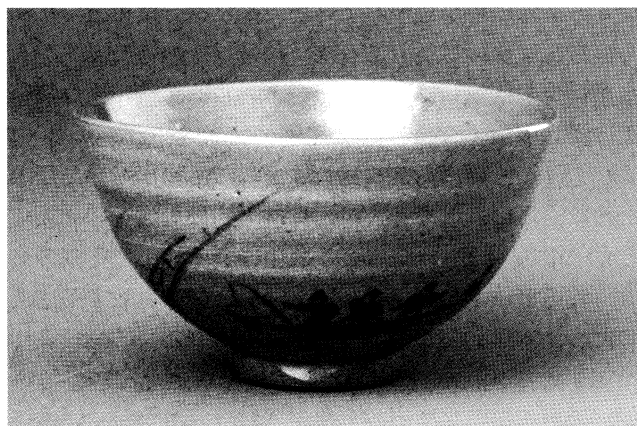
2-04 染付鵜飼図茶碗

金華山焼 福田旭水作

明治29年（1896）～大正時代（20世紀前半）

高6.9 口径12.7 高台径4.4

岐阜県博物館蔵



茶碗の胴に染付で鵜飼を描く。この作品のように、岐阜の鵜飼を題材に採用した金華山焼の作品はたいへん多い。金華山焼は大正時代に、岐阜の特産品として全盛期を迎える。岐阜提灯などもモチーフとして採用されたが、圧倒的に多いのが鵜飼である。金華山焼は、作品の表面に絵を描いた作品だけでなく、鵜飼船形や簪形を象った作品も遺す。



銘印

本作品の高台脇には「金華山」の

銘印を押す。

（4）千歳窯（岐阜市）

林晃三は岐阜市松屋町の素封家、林家に生まれた。本名を幸三郎という。「濃飛日報」の記者をしていた。岐阜市本町に骨董店を開き、商いを通じてやきものに関心を持った。

晃三は大正4年（1915）から昭和15年（1940）頃にかけて作陶活動を行った。窯を金華山の登り口、夕陽ヶ丘の藤右衛門洞に築いた。大正4年の大正天皇の大嘗祭に接して、「千歳窯」と名付けたと考えられている。

晃三は茶人であった。自宅には茶室を持っていた。作品には茶道具が多数ある。伝統的な釉薬・様式を写した作品が多い。刷毛目茶碗、志野、織部、朝鮮唐津、御本などの作品も遺している。晃三の趣向は過去の名陶に向いており、彼の作品に反映されている。

徳利などの日常雑器も作った。民芸調の温みがあるものである。晃三が活動した昭和時代初期は柳宗悦らが民芸運動を展開した時期である。晃三が得意としたとされる朝鮮物の美を見出したのも柳である。この民芸運動が晃三に影響を与えたことも考えられる。

晃三には財界人のパトロンがついた。自宅の茶室で茶を楽しみ、気の向くままに作陶をしていたようである。

晃三の作品は人気があり、各地の百貨店でも販売されていた。名古屋の松坂屋には晃三の作品コーナーがあった。昭和9～10年（1934～35）頃、大阪の三越呉服店（現、三越）の依頼で、同店の屋上で楽焼を作ったこともあった。

2-05 水指

千歳窯 林晃三作

大正4年（1915）～昭和15年（1940）

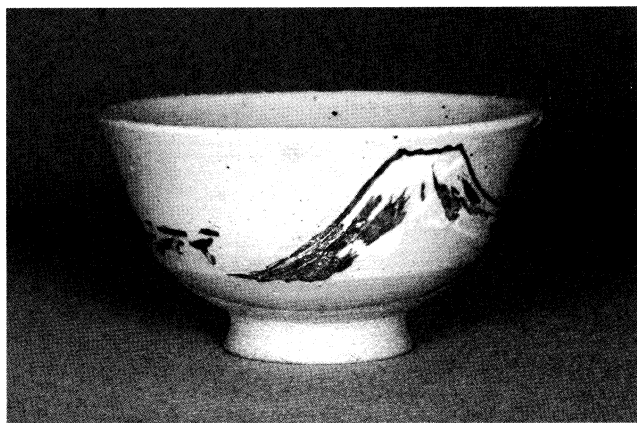
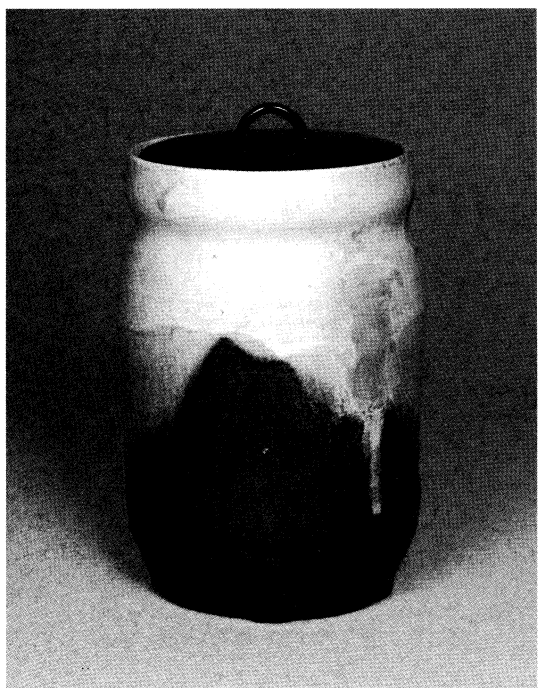
身高17.4 口径9.7 胴径11.8 高台径9.5

個人蔵

本作品は陶製の水指で、塗蓋が付属する。

水指は茶道具の一つである。席中の釜に補ったり、茶碗や茶筌を濯いだりするための清水を入れる器である。作者の晃三は茶人であり、茶道具を多数作った。

高台内に「金華山下」と篋で銘を書き、「千歳」の銘印を押す。印は楕円形で陰字である。



銘



銘印



銘・銘印

2-06 色絵富士図茶碗

千歳窯 林晃三作

大正4年(1915)～昭和15年(1940)

高6.9 口径12.6 高台径5.3

岐阜県博物館蔵

茶碗の胴に上絵具で富士山を描く。青と白で彩られた富士山が目に入る。絵の傍らには染付による「元」の銘がある。

高台脇に「千歳」の銘印を押す。印は楕円形で陽字である。

(5) その他の岐阜のやきものの例

- ・船木山焼(本巣市〔旧糸貫町〕)
- ・谷汲焼(瑞穂市〔旧穂積町〕)
- ・黒六(御山焼の一つ)(岐阜市)
- ・横山鈴翁のやきもの(御山焼の一つ)(岐阜市)
- ・寿山焼(岐阜市)

3 中濃のやきもの

(1) 安桜焼(関市)

安桜山北方の農耕地は良質の粘土を産出していた。この土を使って大正時代から多種のやきものが生産されていた。安桜焼もこの一つである。

大正7年(1918)12月、吉田常三郎を経営者とする粘土工業所が東野畑(東町4丁目)で創業した。原料に吉田地域の豊富な粘土を利用した。抹茶茶碗や植木鉢、建築用タイル、テラコッタ等を製造した。

はじめは粘土にセメントを混合した「セメント枕木」を電鉄会社に供給していた。次に「安桜焼」の名前で抹茶茶碗等を焼いていた。大正13年(1924)5月、高井荘太郎が支配人になると、タイルの生産を始めた。

昭和7年(1932)、社名を「合資会社粘土工業所」と改めた。同15年(1940)1月には、「関タイル株式会社」とさらに改名した。しかし、第二次世界大戦(太平洋戦争)の勃発により、原材料を入手することが困難になり、経営を閉じた。

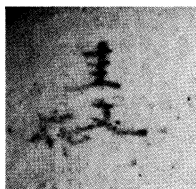
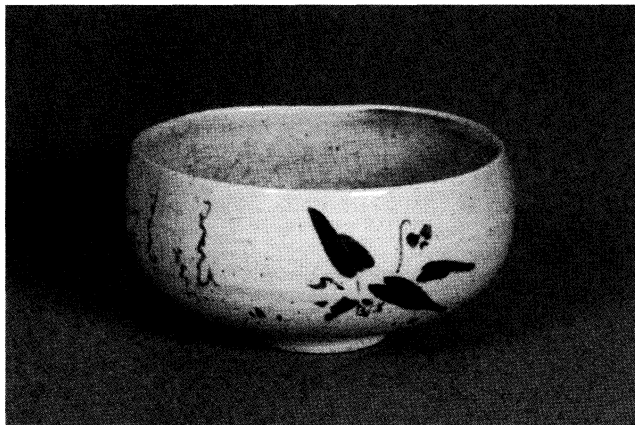
3-01 堇図茶碗

安桜焼

大正7年(1923)～昭和15年(1940)頃

高6.2 口径11.6 高台径4.1

個人蔵

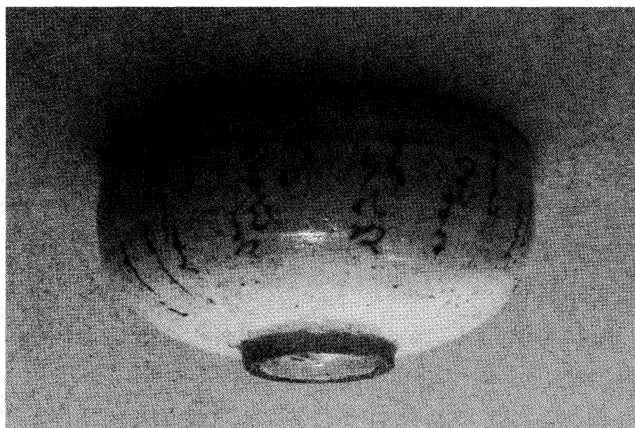


署名

茶碗の胴に堇を描く。この絵には「圭文作」の署名が堇の右下に記される。よって、この絵の作者は伊藤圭文である。名古屋に住んだ画家である。

絵の左には短歌を添える。これは「笑ひ居りすみれ摘む間に日は暮れぬ野辺の遊びはまだ飽かなくに 芳海」と読める。歌の作者は西村芳海という、関の歌人である。本名を市郎次または孝之助という。短歌結社「雲錦社」を組織して、その中心となった人物である。本業は焰硝問屋だったが、芳海の頃は関本町で太物・紙楮皮表類を商っていた。明治36年(1903)、大正14年(1925)、昭和2年(1927)と3回にわたり、宮中の御歌会始の選歌に入選している。

本作品は、白い釉薬の下に紺・黒の絵と歌が浮かび上がる茶碗である。



短歌(部分)

わらひ
すみれ
つむ
まに
ひは
くれぬ
のへ
あそひ
は
また
あかなく
に
よしみ

短歌(翻刻)

(2) ライン焼(美濃加茂市)

加藤友平(本名は正三郎)が制作したやきものである。「友平焼」・「蘇峽焼」ともいう。

友平の家は土岐郡下石村(土岐市下石町地区)で製陶業を営んでいた。しかし、友平は磁器よりも陶器を作りたいと思い、鷹之巣(美濃加茂市鷹之巣)に大型の連房式登窯を築いた。この地は良土を産出し、当時瓦窯が盛んにあった。

大正14年(1925)3月26日に初めて焼く。作品は坂祝付近の岩場に咲いた岩躑躅をイメージしたものであった。釉薬の中に、桃色がかかった赤色が散っている。このため、童話作家の巖谷小波によって「蘇峽焼」と命名された。

友平は、郡上八幡の寺脇栄吉に利平焼の築窯を指導した人物でもある。

昭和10年(1935)1月、友平は没する。

3-02 孫六漬容器 7口

ライン焼 加藤友平作

昭和時代前期(20世紀前半)

〈容器その1〉 総高14.9 口径4.5 胴径7.7
高台径6.0

〈容器その2〉 総高14.0 口径4.0 胴径7.8
高台径5.9

〈容器その3〉 総高11.6 口径3.8 胴径6.9
底径4.4

〈容器その4〉 高6.2 口径3.0 胴径7.4 底径4.3

〈容器その5〉 高5.9 口径3.1 胴径7.1 底径4.3

〈容器その6〉 高7.9 口径3.0 胴径7.1 底径5.8

〈容器その7〉 高7.5 口径3.1 胴径7.2 底径5.3

岐阜県博物館蔵

本作品は焼き締めによって制作されている。焼き締めとは、釉薬を施さずに約1200～1300℃の高温で焼成することである。

本作品は関市内の旧家の蔵から発見された、孫六漬容器群の中の7口である。これらの間には、例えば組み合わせとなるなどの関連はない。各々独立した作品と見



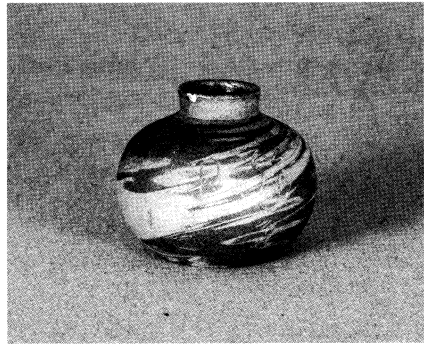
容器その1



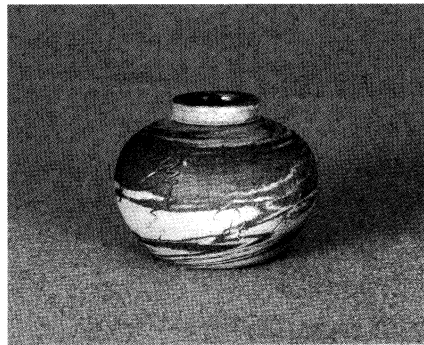
容器その2



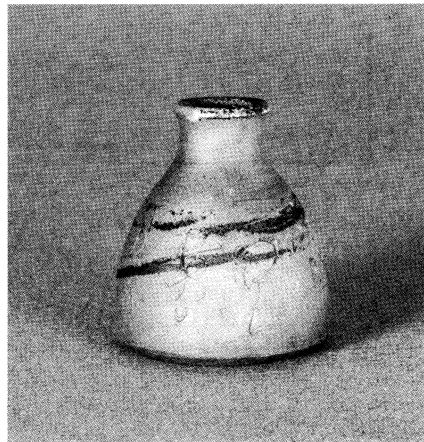
容器その3



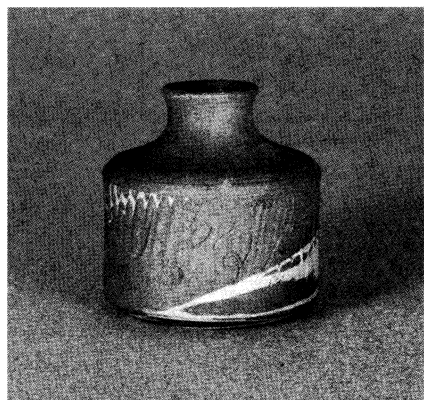
容器その4



容器その5



容器その6



容器その7

てよい。



容器その2の銘印

容器その1を除いて、各容器に「ライン」の銘印が押される。容器その2の高台脇、容器その3・6の腰の下部、容器その4・5・7の腰の糸切近くにそれぞれ押す。いずれも陰字で、文字のみの印である。

孫 六
し お 事 お した
い い 食 い の

容器その7の刻銘

孫六漬とは、大根を細かく刻んで醬油に漬け、福神漬にしたものである。関市で作られていた名産品であった。

元来「孫六」は刀工の兼元家の代々の通称である。江戸時代以降、「関の孫六」として広く知れ渡るようになり、関市では現在でも深く親しまれている存在である。実際は、兼元を名乗る刀工は数代にわたって存在し、赤坂（大垣市赤坂町）と関の双方で兼元の名跡が続く。

この孫六の名は孫六漬にも付けられた。そして、これらの容器に孫六漬が入れられ、土産品としても販売されていた。

各容器の胴には篋による刻銘がある。孫六漬を賞賛する内容である。

(3) その他の中濃のやきものの例

- ・小倉焼（美濃市）
- ・亀藏庵焼（美濃市）
- ・権藏焼（美濃市）
- ・利平焼（郡上市八幡町）
- ・郡上焼（郡上市八幡町・白鳥町）

井戸端は
孫六漬と
一決し

容器その1の刻銘

天下一品
孫六の
あじ

容器その2の刻銘

主は男よ
孫六漬よ
甘まい
中にも
有る
辛ら
味

容器その3の刻銘

孫六の用意も
したい
富士
詣

容器その4の刻銘

せき名物
孫六
つけ

容器その5の刻銘

孫六とつけし
芳し
せき
土産

容器その6の刻銘